

特集にあたって

大竹 恒平（東海大学）

スマートフォンが登場してから早いもので支一回りの年月が過ぎた。この間のインターネット環境の最大の変化は、高速通信が当たり前になり、かつスマートフォンを中心としたいわば身につけたデバイスによって常時情報の受発信が行われるようになったことである。特に、SNS やブログのような、生活者が情報発信しそれをほかの生活者が見聞きして自身の行動に影響を及ぼすといった C2C のプラットフォームの登場は、生活者の情報処理だけでなく、企業のマーケティング戦略をも大きく変えたといつて過言ではない。それは、個人と個人のつながりやその間での情報の授受が生活者の意思決定に大きく影響を与えたからである。

前世紀から人と人とのつながりを分析する研究は社会学を中心として行われてきた。人間は一人では生き抜けない弱い動物であり、仲間や社会の中で相互補助を必要としながら生き抜いてきた。そうしたつながりをどのように、またどうあるべきかを考えることは、人間を対象とした研究として自然と発生したものであろう。ただし、どのように関係が形成され、どう評価されるかについてのデータは、直接の観察やアンケート調査などによるものが多かった。これに対して、インターネットを介した情報の受発信はその範囲が広く、さらにこうした結果はすべてサーバに記録されており、ウェブからある程度スクレイピングすることもできる。こうした大量のデータから、利用者の実像に迫るには、OR をはじめとする高度なデータ分析の技術の出番となる。

ネットワークを分析・評価するという観点では、OR の研究分野ではグラフ・ネットワーク理論という大きな研究領域があり、諸先輩方によって広く深い研究がなされてきた。しかし、社会のネットワークにおいては、従来のグラフ・ネットワーク理論では対応できないさまざまな諸要素がある。たとえば、生活者間のつながりにおいても、それがつながっている消費者同士に有用なのかどうかについては、それぞれのニーズやその上を流れる情報による。また、ネットワークは時間を追って変化していくが、その変化は自律的なものであり、ネットワーク上に流れる情報の価値や量に

よっても異なってくる。こうした点においても、従来のグラフ・ネットワーク理論とは異なる視点での分析や知見が必要となる。インターネットを媒介とした社会ネットワークの分析は、消費者もしくはコミュニティの理解の一助になると考えられる。

本特集は「社会ネットワーク分析のレシピ」と称して、特にインターネットを媒介とした実社会のネットワークを構成する生活者や、ネットワーク上を流れる情報の分析例について、産学両方からご寄稿いただいた。詳しくは特集をお読みいただければと思うが、対象は SNS に限らず、広くインターネットを介した人と人とのつながりを対象とした多面的な分析と評価をご紹介いただいているため、「レシピ」と名づけた。研究者の執筆者の皆様からは、最前線の価値ある分析例をご紹介いただいた。どの事例も基本的には頂点と辺からなるネットワークとはいえ、実にさまざまアプローチがあることにお気づきいただけると思う。また、企業からのご寄稿においては、それぞれの企業におけるデータの活用例をご紹介いただけたことは、本特集の価値が高まったことと思う。原稿をいただいたときに、ここまで書いてしまってよいのだろうか？ と思ってしまったほど、大変詳細にご紹介いただいた。本誌を手にとられた方々には、ぜひともご一読いただきたい。無理なお願いにもかかわらずご快諾いただいた執筆者の皆様には感謝申し上げます。

GAF A をはじめとする現在勢いのある ICT 企業が、生活者データをかき集めようとしている背景には、いろいろな情報を重ね合わせることで生活者の実際の姿に迫り、より効果的で効率的なサービスを提供したいというニーズがある。生活者としてはこうした動きには警戒も必要ながらも、利便性の高いサービスや有益な情報を享受できるという面もあり、功罪両面の中でうまく使い分ける必要があろう。本特集が、社会ネットワーク理解の一助になれば幸いである。

最後に、本特集については Retty 株式会社の岩永二郎氏、株式会社サイバーエージェントの鈴木元也氏に多大なご協力をいただいた。ここに謝意を表したい。